

2022年8月14日 礼拝説教要旨

詩編講解説教118「恵みの大逆転」

詩編118：22～25、ルカ22：31～34

「家を建てる者の退けた石が隅の親石となった。これは主の御業、わたしたちの目には驚くべきこと」（118：22～23）この部分は新約聖書とつながりの深い詩編の御言葉の一つ、福音書や使徒言行録、パウロの手紙やペトロの手紙にも引用されています。それは初代教会の人々がイエス・キリストの救いを解き明かすためにこの御言葉を格好のテキストとしたということです。どういうところでこれが引用されているかと申しますと、例えば共観福音書（マタイ、マルコ、ルカ）ではこの御言葉を「ぶどう園と農夫」の譬え話のところで引用しています。ある家の主人がぶどう園を作りこれを農夫たちに貸して旅に出た。収穫の時期が来たので収穫を受け取るために僕を何人も農夫たちのところへ遣わしますが、農夫たちはこの僕たちをひどい目に遭わせて追い返してしまう。主人は息子なら敬ってくれるだろうと最後に自分の一人息子を送ります。ところが農夫たちはこの息子を捕まえてぶどう園の外に放り出し殺してしまうという話です。その一人息子こそ神さまの独り子であられるイエス・キリストに他なりません。その譬えの中で詩編118編22～23節が引用されます。つまりキリストは十字架で捨てられるように死んでいくけれども、この捨てられた石イエス・キリストこそ「隅の親石」、救いの礎石、土台となったということです。これはまさに「驚くべきこと」でしょう。

確かに、十字架で死なれるキリストがわたしたちの救いの土台となることは、わたしたちの目には到底理解できないことです。でも神さまの救いというのは、本来そのようなものなのです。人間の目には理解できない。家を建てる者がこれは使えないと捨てた石が「隅の親石」になる。隅の親石というのは、諸説ありますが、建物の基礎を組む時に、四隅に当たる部分に据える石。あの熊本城飯田丸の石垣の一本柱をイメージしてよいでしょう。あるいはアーチ状に石を組んで頂上にはめ込む石。何れにしてもその石が建物の全部の力を受けて、建物全体を支える、そういう石のことです。それならそれにふさわしい頑丈な石があるのかもしれない。しかしそれは「退けた石」捨てられた石だということです。しかし神さまはそういう仕方で救いを行われる。そこに信仰の逆説と申しますか、大きな価値の逆転があります。

23節の「驚くべきこと」と訳された言葉は特に出エジプトの出来事を表す時に用いられます。詩編で言うと78：4、98：1、106：22などがそうです。出エジプト記34：10にも「主は言われた。『見よ、わたしは契約を結ぶ。わたしはあなたの民すべての前で驚くべき業を行う。それは全地のいかなる民にもいまだかつてなされたことのない業である』」とあります。本来あり得ないこと、出エジプトならあの葦の海を分けた奇跡などを思い浮かべることでもできるでしょう。万事休す、絶体絶命のピンチが一転、形勢が逆転する。イスラエルの民はこうした「驚くべきこと」を通して、絶望を希望へと変えてくださる神さまへの信仰を深めました。

本来、イスラエルの民そのものが救われるはずのない民でした。エジプトから救い出されたイスラエルは、その救いに感謝するどころか、神さまに不平を言い、挙げ句の果てに金の子牛を作ってそれを拝むという大罪を犯します。そのように救われるはずのない民がそれでも赦され、約束の地へ導き入れられる。そういう恵みの大逆転が起こる。捨てられるはずの石が用いられる。それは神さまの不変の愛によって可能になります。

これは主イエスの弟子たちもそうでした。ペトロは主イエスを三度も知らないと言ってしまう。トマスもよみがえりの主を信じることができない。みんな土壇場で逃げ出してしまった。そういう弱さを抱えている弟子たち。それはまさに「退けた石」使い物にならない石なのです。でもその弟子たちをそれでも主は愛してくださった。ヨハネ福音書は最後の晩餐の記事として洗足の話を書きますが、そこで「世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた」（ヨハネ13：1）と書かれています。またルカ福音書では三度も主を知らないと言ったペトロに「わたしはあなたのために、信仰がなくならないよう祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい」（ルカ22：32）と言われるのです。主の愛がすべてを乗り越えていく。恵みの大逆転はそのようにして起こります。

それはわたしたちの救いにも当てはまるでしょう。わたしたちは救われて当然でしょうか。わたしたちも破れを抱え、弱さを抱えています。毎週礼拝で懺悔の祈りをいたしますが、救いは程遠い現実に愕然といたします。でもそのわたしたちを神さまはそれでも愛され救われるのです。それはわたしたちの努力では決してありません。神さまの恵み、憐れみによってそうなるのです。

そしてこの大逆転こそキリストの十字架とよみがえりの御業そのものです。これこそ絶望から希望への大逆転でなくて何でしょう。キリストは十字架の上で「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」（マタイ27：46）と叫ばれました。そのようにして十字架において、この捨てられて当然のわたしたちを担われたのです。けれどもこの十字架で死んでくださったキリストを神さまは三日目によみがえらせてくださいました。ここに大逆転があるのです。そのようにしてキリストを隅の親石として、わたしたちの救いの土台としてお立てになりました。

このキリストに結ばれてこそわたしたちもまた隅の親石として用いられます。キリストの体なる教会を形作る石として用いられる。こんな勿体無い話があるでしょうか。先週は、佐藤晏神学生が実習の合間を縫って熊本に来られました。ついこの間まで普通の大学生でした。その晏さんが今伝道者となるべく学んでいます。本当に驚くべきことです。彼女が献身を決意された時に、「こんな自分が救われていいのだろうか。勿体無い。だからこの救いを伝えたい」と言われました。これは誰もが抱く思いではないでしょうか。でもここが原点なのです。自分がふさわしいからではない。ふさわしくない、捨てられて当然のわたしが用いられる。この恵みの大逆転を知った者は、この恵みに応えて生きるように隅の親石となるべく整えられていくのでしよう。わたしたちがそのように神さまに用いられていることを心に留めましょう。